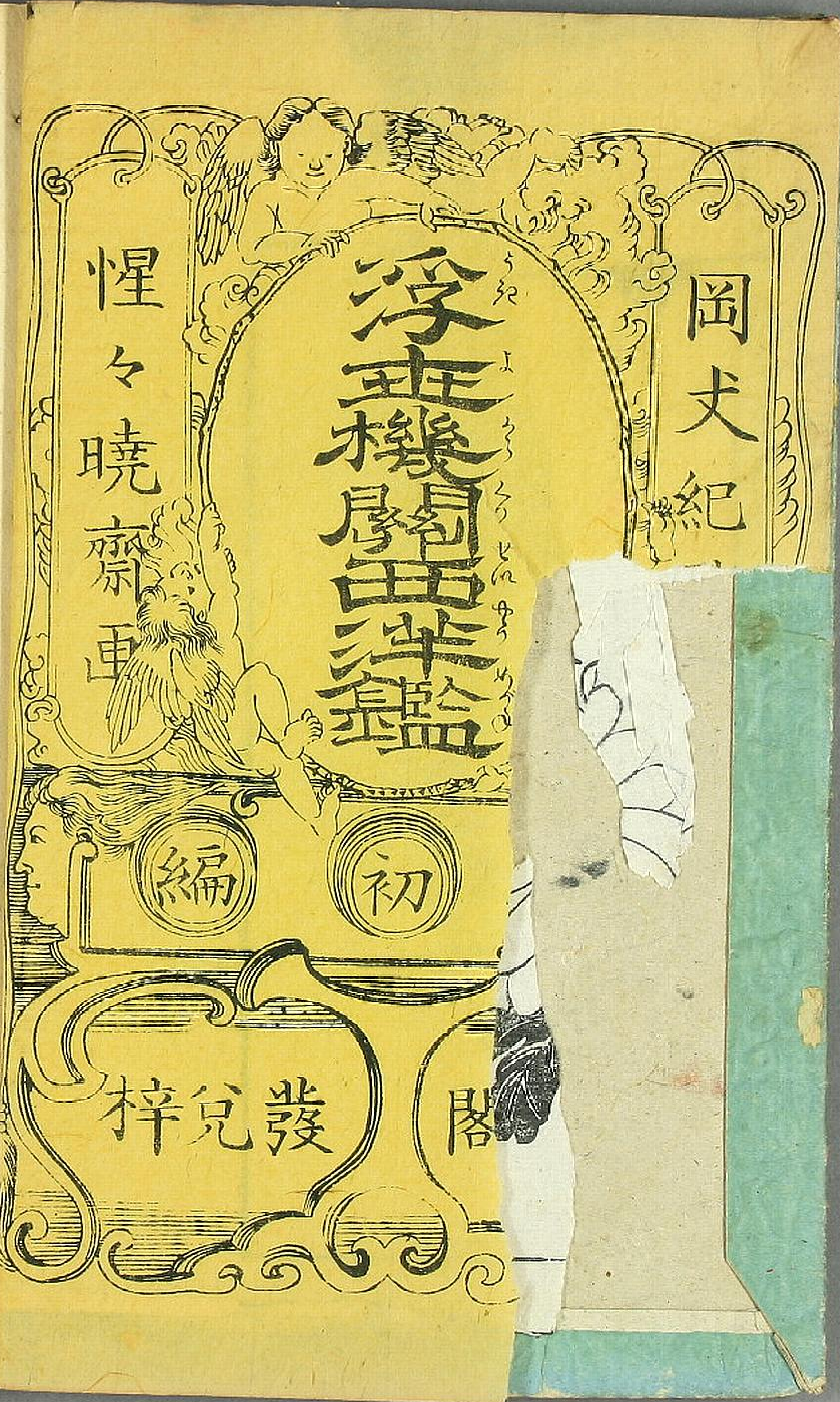
浮世機関

初編　上

三田



岡丈紀

浮世機關西洋鑑

惺々暁齋画

初編

閣

發兌梓

矢田藏書

A764

江湖機關西洋鑑初編序

我輩戮力は土方に傭れ、泰山の底を穿ちて、前世界の枯骨を顯し、紀元前の古きを温ぬ。毎日新聞に備へんとせバ、夫流行は變換ハ、最初取立の開辟より、終に交際は段に至り、銅版の画圖明細に寫し、歴史家の演舌時に随ひ、此

機関の糸を引て、西洋目鏡の變化をしらしめん
贈答の合述、相互に句を次ぎ編を嗣で發端
一部に貴眼が止れど、前看官ハ是で御交代

横濱楓橋下の新居に
神奈垣魯文謾題

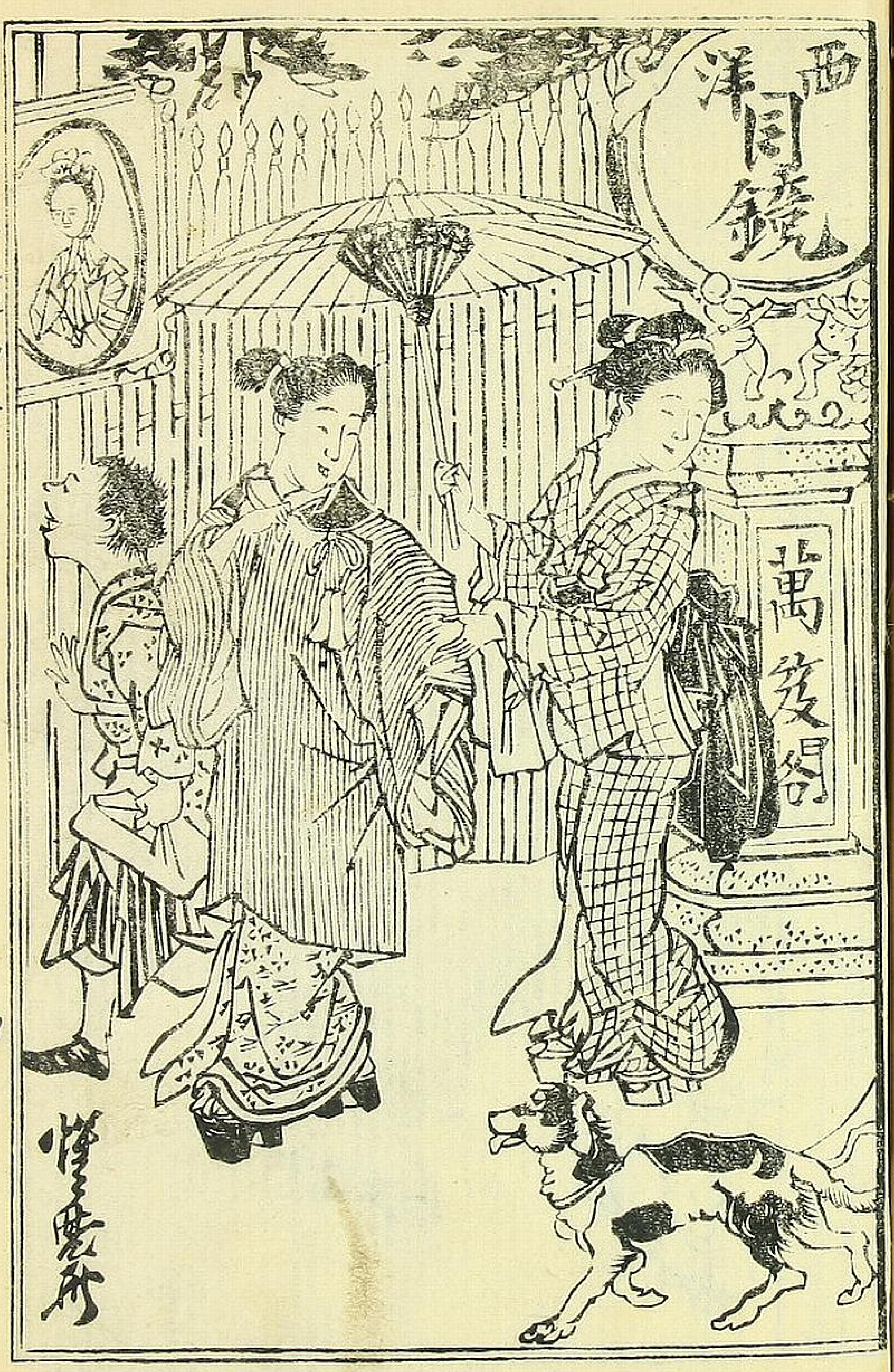
自叙

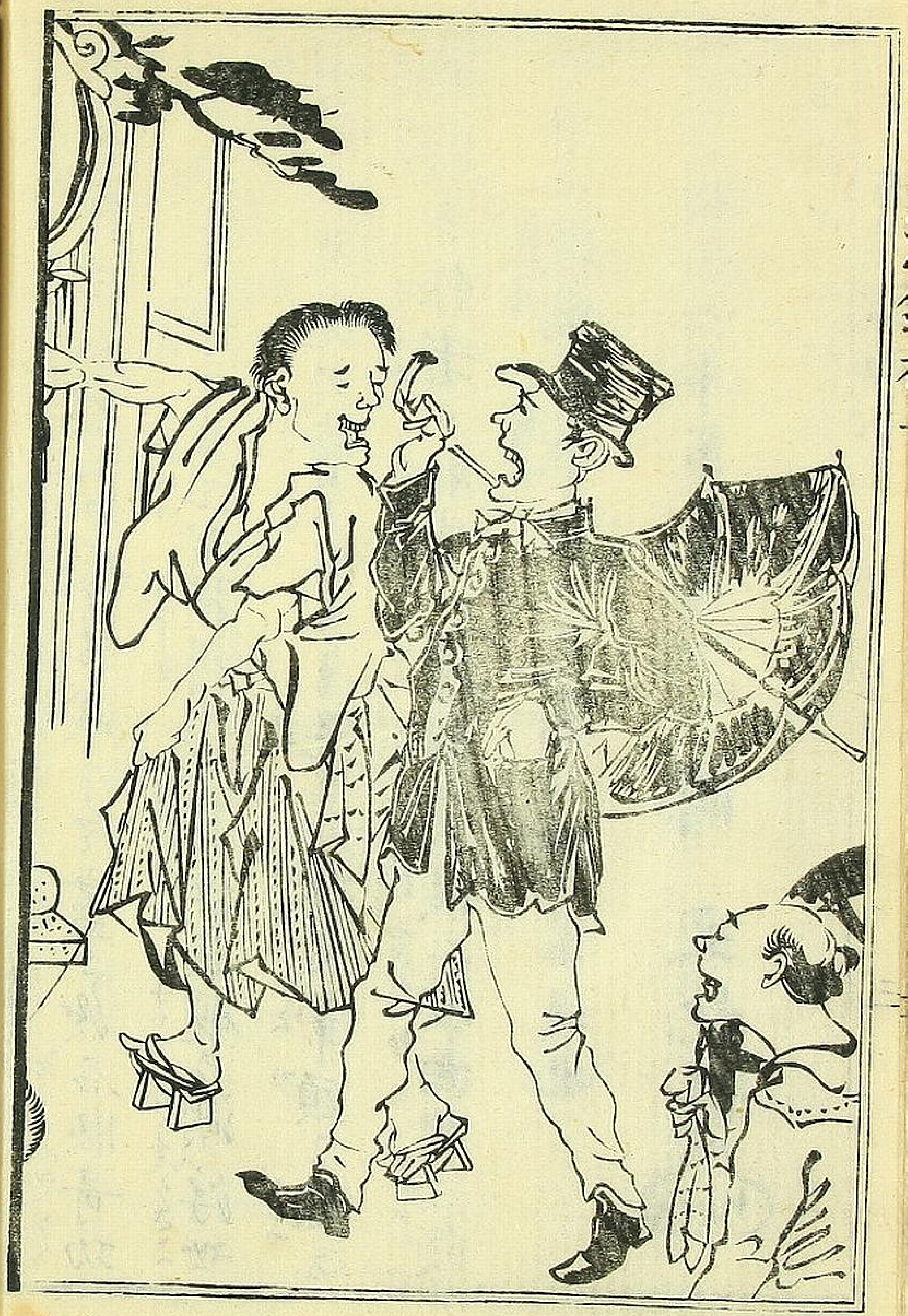
開化停車所より進ミ、日々新橋の新しきハ、昨烏と変はし、京橋までも、櫓端かくし練化の石造されバ、山鳥の尾張街に、西の宮居の跡無し、蛭子乃神の赤髭釣も、目今鯨漁の業にや換なん、白銀座し市街さんがの洋銀に席を奪れ、大根川岸も鶏の置場と轉る明地の開墾、蜊川岸の蛤島原の樓臺

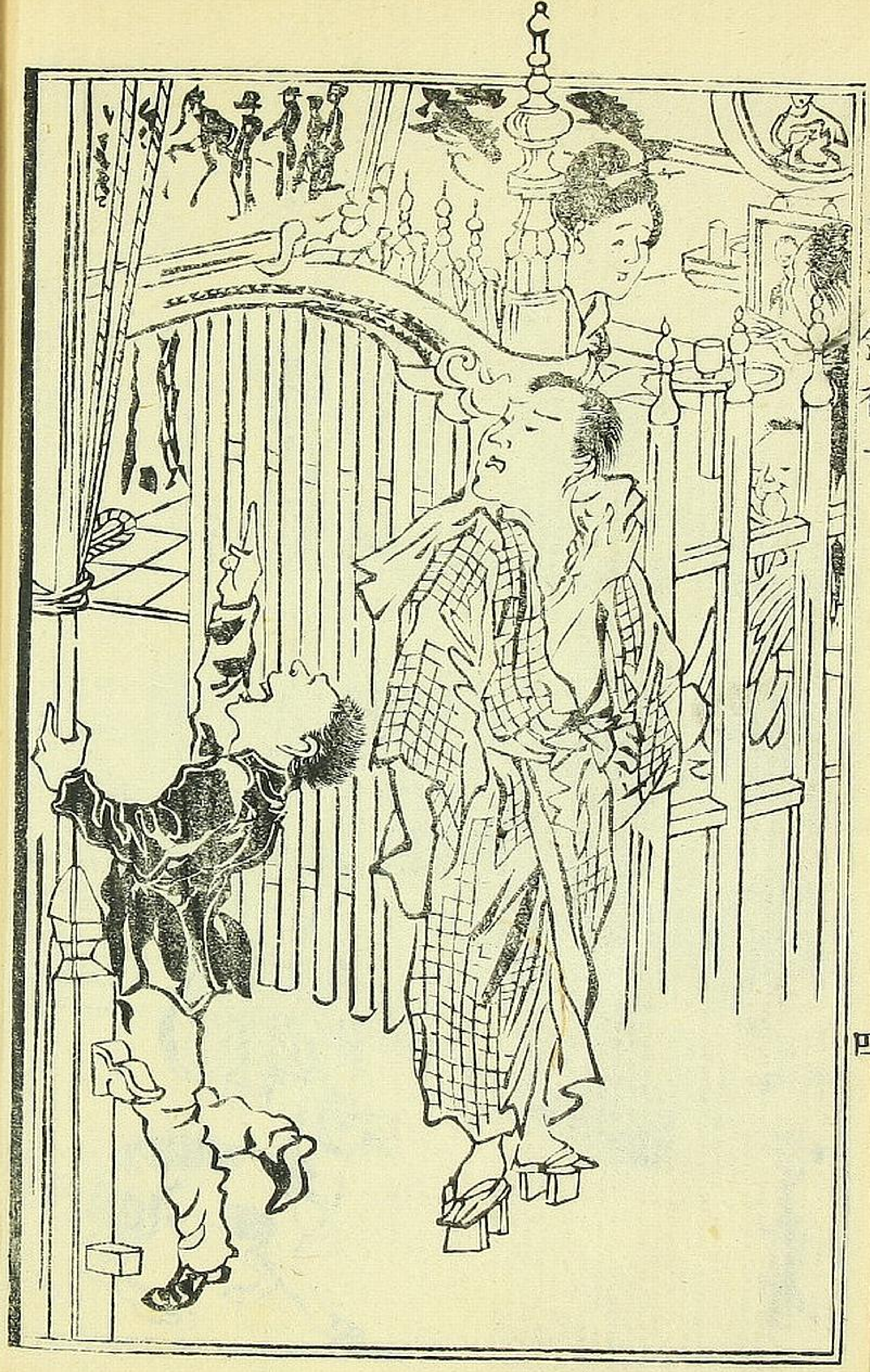
を吹しも守田坐変ぬ碧海岸日新の地ハ真事誌の出店に知られし日本橋は旧習ハ三路に渠架り改まりバ駈馬車の道廣ふして帰路もと元の宮小ひろバ人力綱車ハ壹朱に往来の人を歩すゑへ左方右方の歸合ハ衆く音なり喧く隆盛ハさながら晝夜を捨ざバあれを寫真に取らはなく欲せバ佛の那俺亜爾も玻璃を碎き内田九一も寫玉をも投ぬん銅版細密なれども洩しで盡さバ石版奇功なれども争か真正を摸得ん此景况を硯の湖浮世目鏡に先見の賣卜なりも危うい拙著筆頭に操る機関なく作者が胸中の遺操に一段二段無理三段やッと脱稿て長らしく斯の如くに候也

明治六年第十月

岡丈紀述


西洋目鏡
萬發售
惺々暁斎





江湖機關西洋鑑初編上

横濱　岡　丈紀著述

神奈垣魯文校合

虚言で纃る経紀商の弁舌

「オイ生七さんねしハあの店ハ時世よ何紙さう元然としくみなさるのだ新のふと何ぞろ失敬なすー分ぶ私あんぞへ毎朝野毛山の六時ぶおんと鳴て朝運動の馬車の音ガぐらぐらくまるぐいふや高法の奏乞で先

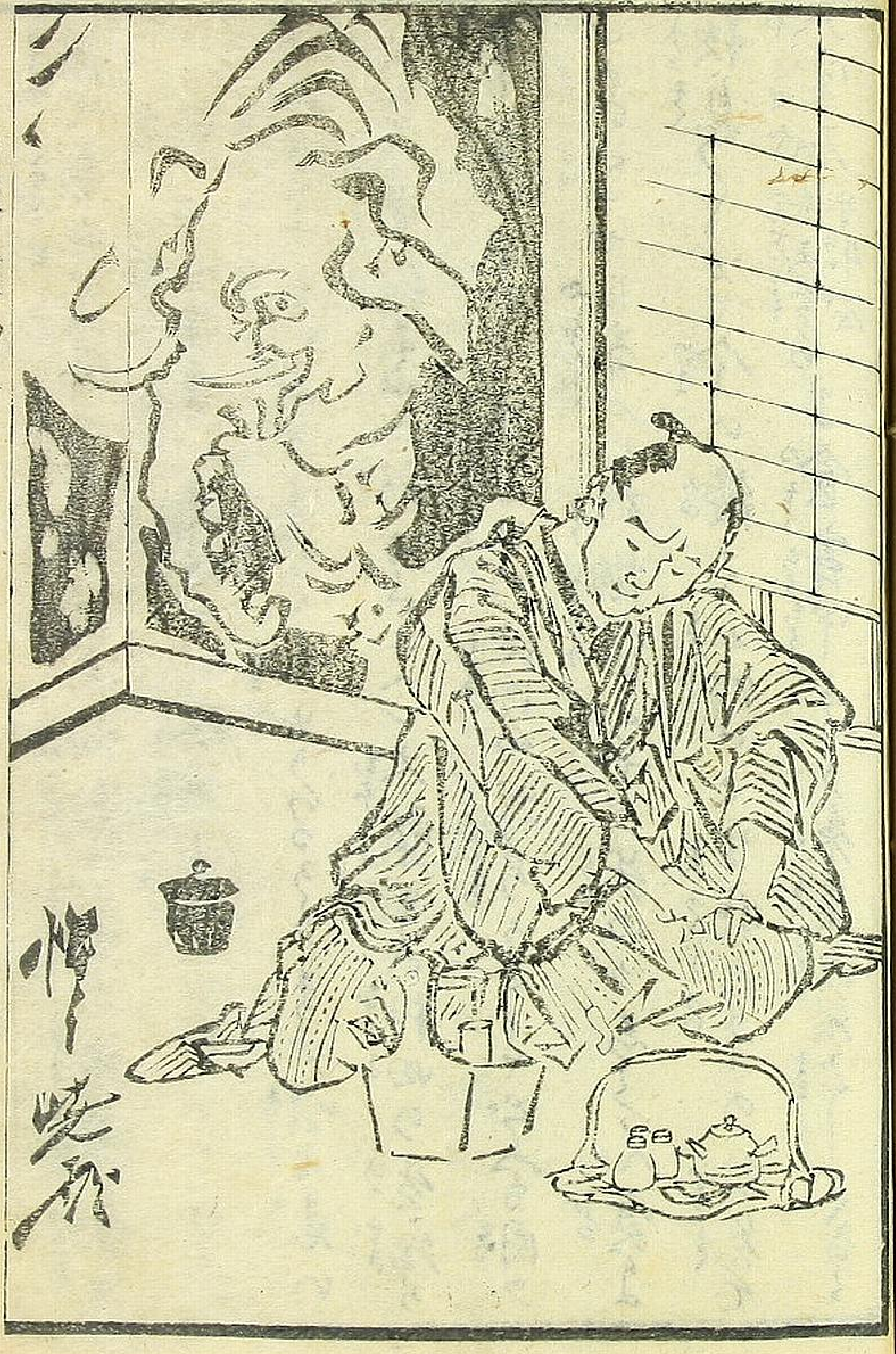
横浜東京とをはじめ大坂から神戸長崎ハいふに及ばず新潟函館札幌の開墾地まで足つづく宅へ入るのハいづくもステーション（蒸気車のり場なり）にて七時の汽車が着時なせそとでまづ驚くことハ毎日の出前若くハ横浜と東京の新聞を読ざるはよむとかやひなきハその勉強といへるものハ幾艘ならも出るべし調度三月なり後々への新発明で或洋学先生ニ依頼してエービーシーの稽古に夜延をかけて稽古さとるがさしことへのさ此者ハあれが勧工場の売子ごとけあるが氷店の指揮ごとらへをがまぐくとよめるやうに何ごとのが不思議さ子をこでいえしの老人ハ商法もやつぱり此理屈で勉強さへすれバ発売利潤に違ひなしサアアくゐがれへなすまで八こそしなんぞハ此ち他人足りは只今年住居くるるが今まで大繁栄しるはずもなく大商賣と肩をならべるぞうあり加うあり押まへもとそろが張りらうが子までとくに湘上の小量集徳がありせつきやうま濱が不案

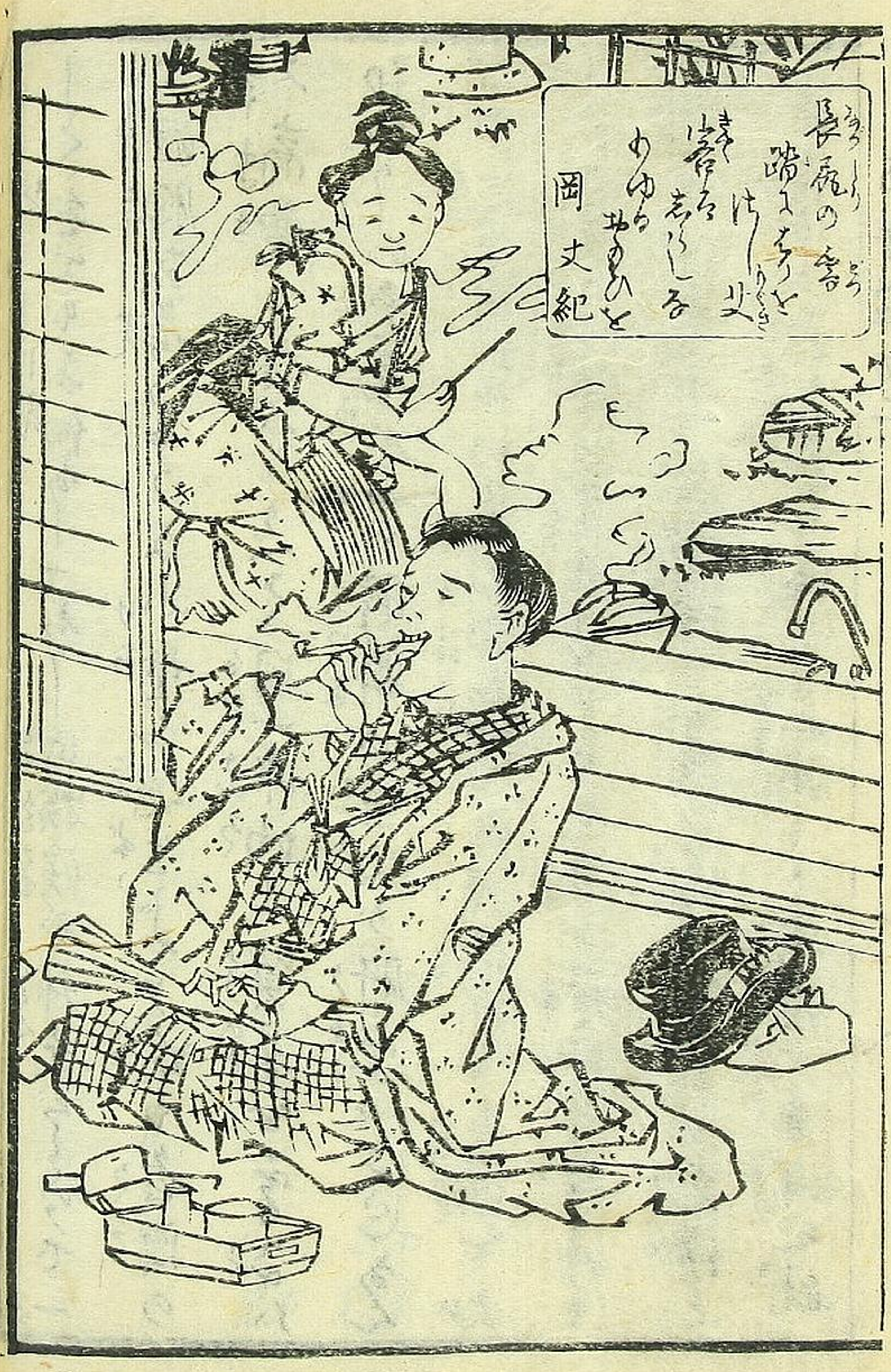
気ざの神戸が大景気ざのとりよのはんかんの鼻元書案
井のうちの蛙サ眼目も中通の香風亭でそれ和田
源の西洋料理よ彼処で第一食卓でたくついてみさ
ところが洋蔵と銀器清よ出会てゆるく各話のうち
彼奴等のいふにハはんふ景気の時節に向つく日本の舎
西方向不足の商法き三ヶ所が陸の束縛突目種で蝶
山が電線の綱をとり紙きるやうなめんぶる風紡紙
きるきりがよろらうとねつしよぞ悪薩なんぞ太腕の

さへる紙きれんや商法まうけてハ自負しやアあのが那破
呑と華盛頓紙合併して自己ぞろう百職百術の利
八釉中よありサところで甲鉄船よ蒸さゐる持ぐ
亜米一ゥう引当さ二万弗の尽税紙四屋目分の失費
もゆと六もに一時景気のよるいのを百も承知で二月だろう
持こえるので一寸五千弗の利潤ありサナントねるぞ
ハ是しらと違ッて発明あり算美ハよしか是よ黄白の
出どころハいくらもあるし悋めのぞが男の英粟のと

藝のいるのがまるで夜さ暫時有る佳衢の流連や佐野蒙富貴様の藝技空然奢しまくりさへ歎されさとなく一月ぐらゐ懐發してゐるさい勉強ありやアあるなど商法の功が積で伶物氣支の居中じやアあいが天から精部がふるやうサ其の時なやア二升の五樽造紙眼下にみえおろしく國立銀行の出店ふしくなど大形の縦横をするのもさきこそ自由の擢ぶものやア況發とらしが受合證文へ沽券印紙を張てゐる

しかし老ても子細なしサあらし此横濱や神戸ぐらゐで生涯腰抜居るやうな小量な纒生じやア途も各國の大商賣と肩を並べて同一平場に貿易をするのかむづかしいの兎角人といふ膽脾の巨大が肝要サほじあんざア及ばずあへまでも太平海で蒸氣港く旭日を火器に据て地球張あらがよして遊ぶ量見で居るのサ此度の大商法で大戯場がらあへ、出るとそれを元價として自から飛脚船を遣って上海から香港大東洋を航


惺々暁斎


長屁の音
踏よぢりとけし丈
嵜ろ志らしる
わゆらゆかしと
岡丈紀

海て桑法蘭西士哥紐約克倫敦巴勒の諸港を乗廻し何でも世界第一商法の大棟梁となるつもりサ十二けへハよんどころねい用があつて今出かけるからまた明日来いとそゝくさ何処へ行のだ子へ大繁昌の村田の盛席からさもあけやちやア清正公の地内で揚弓子イヤだよ団ツとめぐナゼ日本人ハ何懶惰くせが失ねへ事ぞん実るよ鞭息くオヤ今の縫まえ時ぞと生活時平の鉄鼠で八雲屋弁天参りの時計屋升屋よ食客中ぞう兎角滑稽迄しておる

ねへ十二時ハ二十一日だとそりやア大変だ直から本田の桐師屋へ行て綿羊の分一でも取らねばならねへとまた歓ちの兀天窓が痛ぞその燦然で眼玉がセコンドの廻ふ様だハて手紙がくると今から頭痛がして来るぞ大商法の下でしら人ハ滅法胃が利るハサテ勅楽紙揚るとし出う

拵せおやろましうか

當世擬も野幇間の迎言

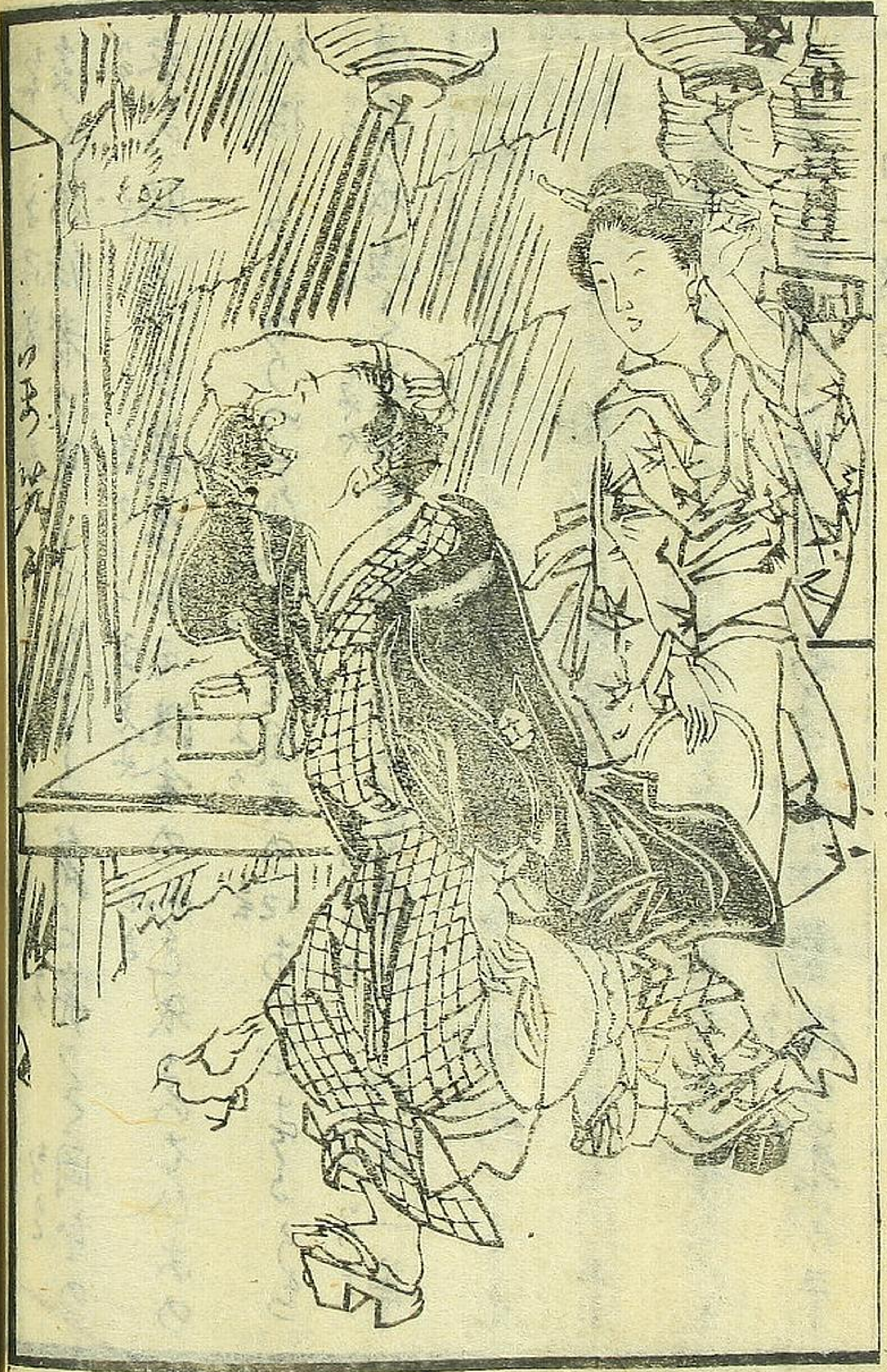
「イヤ大事ハ久さき彩紙をせねが何も御壮健いかで

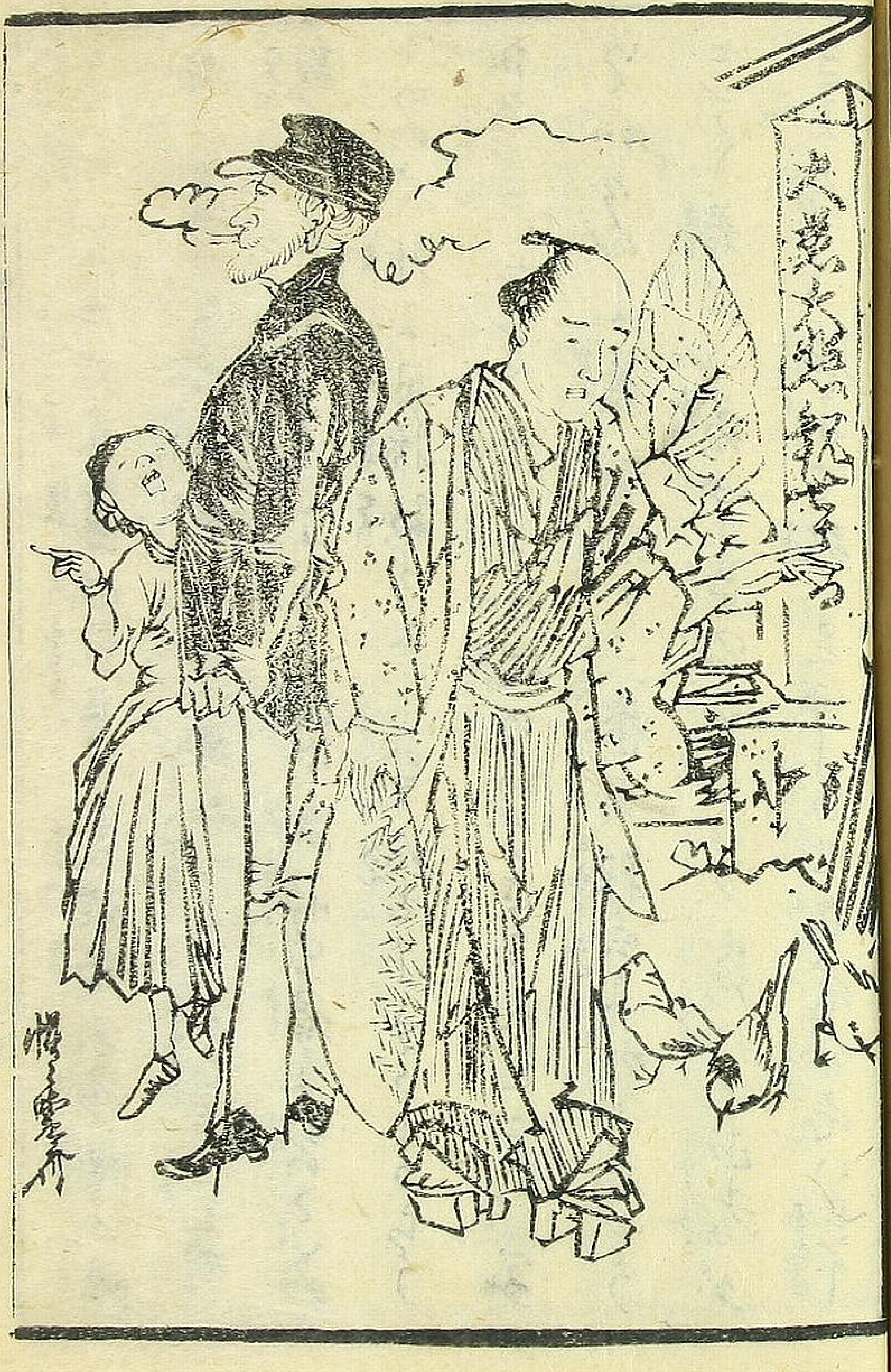
こゝろせ世話ふおかしくばんだ山まき山を出めぐりといふ洒世界か子目今山内の形勢ハ水茶屋の流れハ絶へしくらゐも元の水茶屋ににぎハぬ太陽暦以後の景況ハ殆ど嗟嘆のかぎりでゲス従前ハ沢山ど知らまで盛り新店の英華魚をまよいませんと欲するより東京繁昌に迫り雲井に命ドあるひゝ紳士太夫の老淡紙縦し移り豪の西洋紙かりて百方説諭紙つくし番仙楼乃主ハ氷月亭に金の平肉の利益従たのミまりやくみして右の枕に宿銭かけるのでゲスが当時ハ大いに開化して西洋のオーライといふ洋語が行ハるゝくちびると其の家ぐ帳り楮幣ニ金等より勝ッてあざやかもステーションの札賣のごとくでゲスからの中も閉鎖なしの明紙よりしむ書ハ可なりの清元門よ一流起もし権兵衛が種まきやア烏がほじくる三度に一度ハ追はずバなるまいと其のびくく妻君逃らひ其さんあるを驚くにたへてラス○へイあの甘酒屋の別家ク子が亭主ハ兎大黒屋の中のうせ

ものゝ松本の滑稽ぶりせうサナくたのしく美妙じやア
ゴウせんゲ一寸世話場の幕ハ中二階の白面がよし
凱さきさきで向上面紙唱采といハせるまでのるのでゲ
スを見よりハ今度仁王門の奥まりたる方にありあいて
場のおよふと糊墨しらく奇なる婦人の出現しさの段
御注しりせんと当時の岩井・業者嵐叢三郎（滑稽二代目）まねびし
の数録撫サセシ是なる宗家統御説しらく御筆説あが
れたる人附代る洒落まぎらでゲス僕旭女らる大檣

辺の大宮交よ縁しく若干の月令紙ありとの気ぐ
きゝさの縹まち久しふりで情中が零をときてちとろけ
雄乃気條会よあいぐるゝも也るらう君の附属なうと
いへども数銭を点眼ぐゲスその如くりのやア婦人
揚覧のことごとく新介の新聞紙曙附属して君と並
立の権紙帰るやステント起めしやる解放後の航海一
勝手よ花嫁人の進歩あるさると久を患しやア中間たう
月給の頭巻まちサ等外附属の身上ら子突ハ左

方が會社に關係あるよし喜悦斜ならず饗あつ
一英國まではふんがありゆゑから少壯の富貴あう
旅寓所は互中務の美容紙ガラスどうめしきともに紙
郭内なる土産といふ銘面ハぎうでゲスナ一今からまぐ
よ此幽溪ざんそのつやアちりと早まぢの黒御門ざ
がそ見てよこそ座滋の間屋にあれ例の富士震から六
ツの田舍紙そのぬけの湯守くそくの中屋敷新開町
旅寓よりえく水屋尻の剣橋といふ此屋まちぶが渡辺ハ
多く老練者が毛しきくわるから前と寄ッき岡本の
寮の勝るらが英學不日洗舎の知己殊さんそもむの
剣橋からとまりづとむ舎子で風呂のにあげをまるうち
彼等紙溪く茶屋をよびあげの先登技の經選一等
官一組に溯の義理で處業どうやう子男藝者こ並も
一組ナントおの鋸向き測深もちドやアゴウせんろ〇エー
初對面のオーライハ此究ざとおつしやるら突よく
足なり繞得く可なり志るよする登樓の策でろエー





惺々暁斎

クラツパハウスの美麗壮観なるハ金鶏楼五盛楼の他なり ダガ子ヱの娼家ハ今紫蒲柳花の三妓が欠ちやア顔を見るのさへなるまし況や名妓の君においてをやトツても外に目指顔をなし ハテ何としようぞう ホアーツ、テンツ、テンと出端のありさうなところがいくだんに幕を切る二番目稽古にかゝりやせう モシく君く庭中での刃うもうく露八と幽妻がまあよろく眼子で顔ハ見もさせまいで金でハ臣下

のおふくめえん路からまねその先に見えぐあの道築サア郷へお為あされましアイ多くまあんまの廚舎で名地名によ溝つまづいて小指の爪を敷线く モシ御立合よ血留あるし クツ

墓後から死る洋学生の大鑓

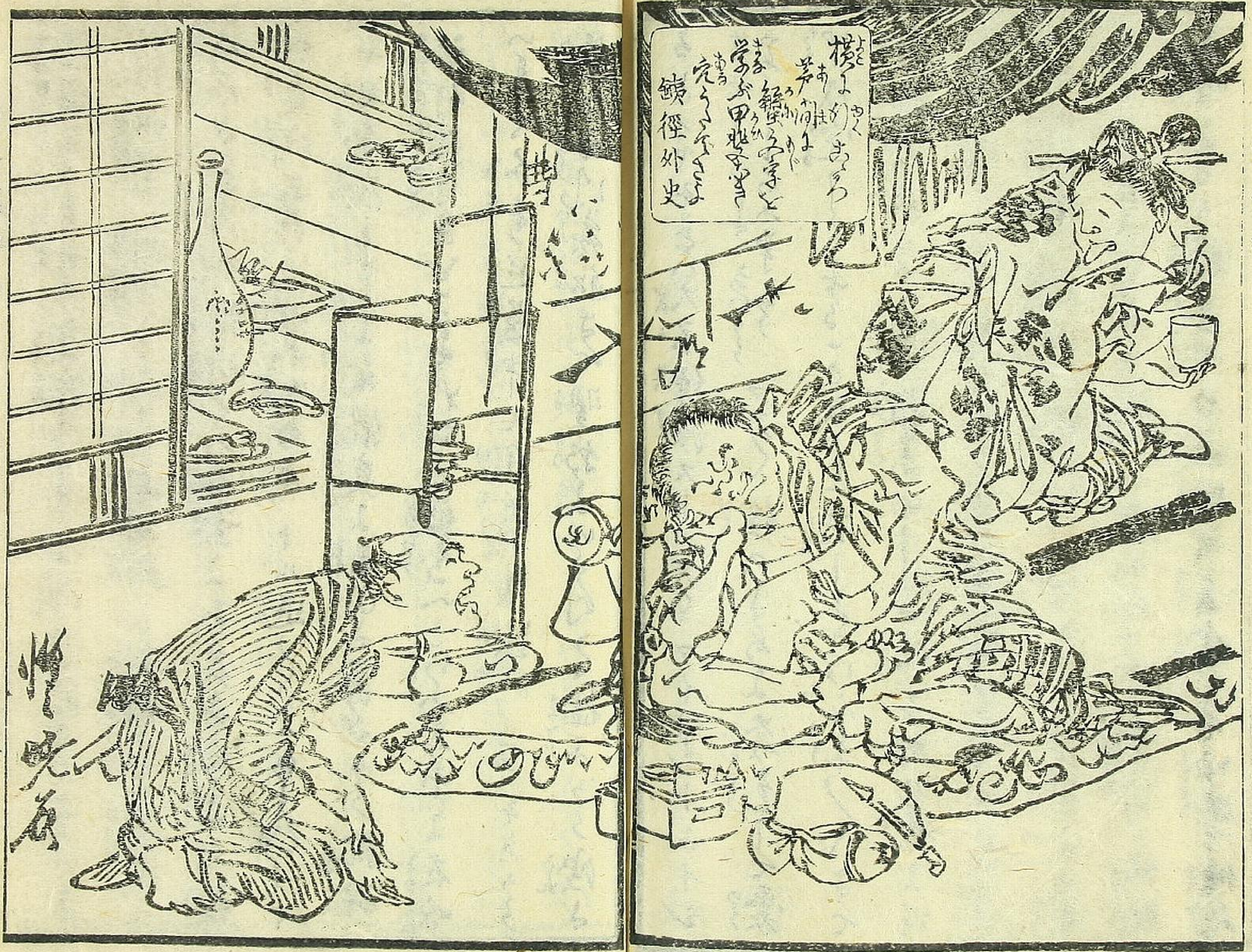
「イヤあまりか先生マスタル 菓緒あて先生がたハ名誉へまでまつの地よ御留学からナント久しいものぶ足しかろと絹度僕が同窓しそのれおきて三年前よあるテイヤ

当時は学風も一変して正則がさかんだから吾輩の門ともいへるところサあゝし世間の懶惰先生が文典一枚に中々一年かゝッて会話一冊にやつと数年かゝつたのとイヤハヤ笑止せんばん不勉強きはまつた徒かく時勢が今ハ公明正大の時にいたつてあらゆる光陰を空しく費すものハ実に天帝に対して大罪なくトキ不何紙の勉強かネ○ナニ米国史をよむとイヤ其ハまるで道中上達するとてあゝくとても吾輩などのおよぶ門で

及ぶところにあらず嗟嘆してやまざるも或商賈が僕の寓居に来つて曰くなんでも先生の時勢ぐらゐまづ商法をまなぶもいれハ勝優ところまでハ慶優とる松圃のたりるぐらゐの英語紙あるかねと言から外国人に経済をうけく大業をあつかねといへく僕に大鑑額英学の教授紙批しなくて後世おそるべし遊識ひきいまる校サそこで先例の松本の会話篇一本を投じて入門謝儀を圓金三両とせしがうましサどこ

ろぐまで彼がふそび曰く今日ハ此所の関ともま
ぶが世人ハ何ぞ入の体裁と従者ら元来僕ハ同窓
之とともに県近所の鉄剣書肆よりざさるへまそくに四
名のシンガ（英語にてシンギングゲールといふを俗に罷しく妙くいふなり）娼妓の大数
戦と出かけぞうか妙媚その座の会計纏頭ハ僕が嚢中
我開くことなしサイヤあまとらみても全く僕の独なれバ
毎に実学の独とハいつて居しぞろうに蒙まを身を騒
わざの不幸僥とハ俗説の全然なく○ビールを嗜

るとイヤそれへ大不経済ストップ〳〵アイドントプウイシ（英語にてのきさくあいなるべしといふ事なり）マア〳〵僕のためよ奔走して嚢
中紙空しくなることあらバ決して後悔させ
逍須失敬ながら今日推参いたすも縁の義よ付
らバ僕が一個志のむざる饗応の端かもかサその实
一眺夜間縁の胴又ハ飢問されくなるらバ芳家の椎
歩と出かけるところか巡回一遍みして京二の茶館
を喫まるか揚屋町の水湯紙立合して帰宅の條縮



横ばかりあるく
芦間は
蟹の字と
学ぶ甲斐なき
亮らかなさよ
銕徑外史

堅固なるも世の交際のかなしさにたゞなくれならざりき

かの壮士が宴室よりして遠猪獅に或綱家人登楼に

及んどころ所謂酔ぐるひ名案にあらねど向島の健

利交代志げく呼吸のボットル通ふくにあそびイヤ

ハヤ日本酒とビール酒混交に用ひさせのぞうう沈酔

酩酊殆ど是をもされうと彼處へとはふ志れに友喚

つまゝふ為蹈足もつれ中で閨房へ寝込みつゝさぐりてねる

後は自由新船させ溜躰にいるく盪子うち浅ぶ

朝日が面上を照すので愕然としておどろき覚て床

枕よりかけし六角時計をとると午前七時二十分すぎなり

て朝飯を命じてかの連を起させにやると姿もなし

かの人は今朝東明拂暁にかへりしといふので心中大いに

激しなが彼は僕の嚢中をもうし僕も彼の嚢中

を計りて原由何れも人だ羅紗服にあり茲が立志編

までなる無り失りて最善の試練ありとくつと揮然

落着て恥辱の今斗なる証とりよせてみるとビールの價が

一圓ニ分揚代と食料で三圓ばかりとられる存外の散財と恍惚ハしたものゝ弱みを見せじと平面で今やるよといふところの サア困るまいものか嚢中にはウヰオンブースリーセント（英語にて一分とミセンといふこと）むろんまるで進退谷つて慚然赧顔べそを左右と見踏るもさめて穏若の居續よ處せらるゝでめへ何事か愚臓のいゝかと若者紙呼つけて連紙先へ申しその紙云がゝり大殺篇よ及んだが一件居所不定の一書生紙連ふしく抱へんどのが僕の失錯なり また若者もあらく條理紙云あらくて僕が暴動の所為でもありくらし邏卒ハ番人紙連ニきそうな天幕で流しよ不寝番紙屯所へござらせさうか各掛ひげかしく今ハもや是までなりと摘と御せ縛紙技術羅紗形状しく田町邊の知己の家人金策の明檄を飛せと朋友ま真多し無論ハ卯りの為問を来さので まつれ者遂も おつさまらうねと策を入て附属とまで流通しあれ紙連て富岳人突さくらが

元来空乏にて旅なく一切僕の什物を引当に貸たる者質屋が六圓二歩ありて是又圓もらじ沢濃くの以馬を久しくホツト一息突てゐるところへ横町の牛肉屋が二分何とか書付が到来あれも彼是とせかれうくひかゝる先引当の残金の内へ僕ツさりのとがつらに一圓分まりところで酒店とさしあ菓屋のちびく買債が二朱一朱拂ひつくしく二分ものこらぬ大團迫実に困窮の生活にもあまる君飢に及んでテそ哉

年の交際にあまり久しらど汽車下等の失費さへとりに兼紙飛间しかれ君多年当港の隠居居する人諸方の美人陰に知己ありときろしく世人をして小使ひホーイの備ひ紙探索してからそのつねでが分偏皆肉一疋潜伏の策ぞうう今まにされバ決して月給のぞこる〳〵サ自ぜんけろけが急くまうねと逆境汗顔のらくりだが止紙路も貴家に食客となりて厄介をかけねバあらねさそく團迫する例のかずがさんどの車絆ハ

失錯中の失錯実上達よりうね措来サ君喜友の交り紙の如く一時も早く周旋をたのむ

江湖機関西洋鑑初編上巻終

周清外史

日本馬杉繋先生著　清　王治本先生閲　全部廿二巻　合　十三冊

定價三圓廿五銭

近世所行支那略史ノ類記事過簡ニシテ實ヲ省キ怪異百出荒誕無稽讀者之ヲ厭フ先生慨然トシテ筆ヲ抽キ上ハ周ノ平王ヨリ下ハ清ノ今日ニ至ル治亂興亡謀戰忠邪ノ跡歷々詳記シ怪異ヲ削リ荒誕ヲ糺シ姓氏ニ因テ編ヲ立テ日本外史ノ体制ニ擬ス名テ周清外史ト云フ弊舖之ヲ先生ニ請テ梓ニ上シ世ニ播ス四方讀史ノ各位最寄ノ書肆ニ於テ此書ヲ購求シ賜ヘ其直筆精妙ニシテ疎漏ナキヲ審ニセバ幸甚

東京日本橋區本石町貳丁目

書肆　江嶋喜兵衛

010190523050